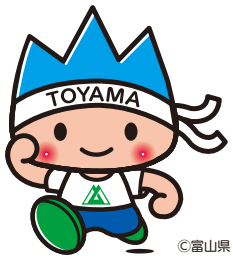
― 保育者と教員が互いによりよく理解し合うために ―

わくわく・きときと接続ガイドⅡ

幼児教育と小学校教育

子供の学びは連続しており、一人一人の資質・能力を育むことも同じです。保育者と教員が、本ガイドを片手に保育・学習参観に出かけ、子供の学びをどのようにつないでいくかについて、一緒に考えてみましょう。



©富山県

- ５歳児と小学校１年生の２年間を示す**「架け橋期」**は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるための大切な時期です。
- **「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」**を手がかりに、保育者と教員が目の前の子供の学びを共有し、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図ることが大切です。

幼保小の架け橋プログラム

幼稚園教育パンフレット

５歳児

子供は「周囲の大人との愛情ある関わりの中で見守られている」という安心感に支えられて行動範囲を広げていきます。

また、環境に関わって様々な体験を積み重ねる中で、総合的に学んでいきます。

知識及び技能の基礎

学びに向かう力、人間性等

思考力・判断力・表現力等の基礎

周囲の大人との愛情ある関係をベースにして

幼児教育		小学校教育
「感じる」「気付く」「考える」「工夫する」「興味をもつ」「関わる」などの**経験を重視**	**教育の目標**	「～できるようになる」「分かるようになる」などの**目標への到達度を重視**
遊びを通した総合的な指導	**教育の方法等**	各教科の目標・内容に沿って選択された**教材による授業**
5つの領域からなる「ねらい」と「内容」 健康・人間関係・環境・言葉・表現	**要領・指針**	**各教科等における目標及び内容** 国語科・社会科・算数科・理科・生活科・音楽科・図画工作科・家庭科・体育科・外国語科・道徳科・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置きながら、小学校以降の生活や学習の基盤となる資質・能力を育成	**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について**	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を考慮し、幼児期に育まれた資質・能力を踏まえて、教育活動を実施

幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？（幼児教育及び小学校教育関係者向けの参考資料）より

「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へ

令和７年１月　**富山県教育委員会**

令和６年度　幼児教育・小学校教育接続ガイド改訂委員
小林　真　波岡　千穂　小川真紀子　開井　千晴
新夕　佳子　廣田　香絵　松井　敦子　森井　一代
渡辺真理子　四十内遥香　越村なつか　小林　雅恵

1年生

幼児教育での学びを基に、これから始まる小学校での学習の素地を形成していきます。

幼児教育での学びを基にして

5歳児の栽培活動の例

＜保育者が大切にしていること＞

◎発達の段階に応じた活動

発達の段階に応じて、個人の問題をクラス全体に投げかけ、集団の問題として取り組みます。

◎集団の中での個人のよさ

子供同士が関わり合える環境、一人一人の思いや活動をつなぐ環境を構成します。

◎様々な葛藤やつまずき等の体験

遊びの中では失敗も貴重な経験であり、子供はやりたいことに向かって夢中になって取り組みます。その中で非認知能力が育まれていきます。

※東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/）令和３年度文部科学省委託事業「非認知能力に関する保育・幼児教育施設の意識や取り組みと園児への影響に関する調査研究」

非認知能力とは※

◎子供の行動や心の動きの受け止め、認め、励まし

自分の考えや思いが受け止められた喜びを味わいながら、保育者と一緒にじっくり考える時間を過ごす体験が、自分で考え、行動しようとする気持ちをもつための基盤になります。

◎好奇心や探究心

その子供なりのやり方やペースで繰り返しいろいろなことを体験してみることを楽しみ、その過程を通して友達や教師と関わる中に子供の学びがあります。

◎子供の自発的な活動としての遊びを中心とした生活

子供の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習です。

事例１　事例２　事例３　事例４

― 学びの様子を

環境を通して行う教育の中で、一人一人の子供のどのような力が伸びているかを捉えています。

Ⓒ育てた野菜を食べたい。
Ⓒ料理をしてみたい。
Ⓒみんなに分けてあげたい。
Ⓒ家に持って帰りたい。
事例４

Ⓣすごい！野菜ができてきたね。

子供自らが、様々な方法で調べて　試して

Ⓣ困ったね。どうしよう？

Ⓒなえがぐったりしている！
事例３

Ⓣ本当だ！

Ⓒ葉に穴があいている！
事例２

Ⓒくきが伸びて倒れそう！

Ⓒ大きくなったなあ。

Ⓒ去年の５歳児さんみたいに野菜を育てたい。
事例１

Ⓣ何を育てたい？

Ⓒ大好きな○○を育てたい！

○　幼児教育、小学校教育ともに、ここで取り上げたのはあくまで例です。子供や地

比べてみよう！ ー

単元や本時のねらいを達成するために意図的・計画的に授業を構成し、教材と子供とねらいを客観的に捉えています。

Ⓒ手紙を書きたい。

Ⓒ小学校のことをたくさん教えてあげたい。

Ⓒ私たちも次の１年生に、たねをあげたい。

Ⓣたくさんたねができたね。

Ⓒ大きな花を咲かせたいな。

Ⓒ花が〇つ咲いたよ！

Ⓒ友達のつるとからまった！

Ⓒつぼみはソフトクリームみたい！

Ⓣしっかりお世話できるかな？

事例６

Ⓒ園では野菜を育てたよ。

Ⓒどんな世話があるか教えてあげるよ。

Ⓒお花に水やりをしたよ。

Ⓣ一人一鉢、アサガオを育てよう。今まで、何を育てたことがある？

事例５

Ⓣ：先生 Ⓒ：子供

１年生の生活科の例

＜授業者が大切にしていること＞

◎進級する喜び

自分の成長を支えてくれた人々への感謝の気持ちをもち、これからの自分の成長への願いを膨らませられるようにします。

◎最後までやり切った自分への自信

１年間の学びを合科的に表現する場として、新１年生を迎える活動に取り組むこともあります。子供自身が１年生としての成長を実感できるようにします。

◎生活の中にある学びの楽しさ

子供の体験と教科の内容をつなぎながら授業を構想することで、実感を伴って学ぶ楽しさを感じられるようにします。

◎楽しく書く経験（生活科、国語科）

アサガオを観察し、その結果を観察日記に記録するなど、教科等を関連させて総合的な学びの場を設定します。

◎学級の仲間の存在

学級が、自主的かつ協力的な雰囲気や人間関係となるよう、また、どの子供にとっても居場所の一つとなるよう様々な機会を捉えて配慮します。

◎学習活動や発問の工夫

幼児期にどのような活動経験があるかを尋ねるなど、子供が経験したことを思い出しながら活動できるようにすることで、子供が安心して学習に取り組めるようにします。

小学校学習指導要領解説生活編

事例５

事例６

域等の実態に応じて様々な取組があり、保育者や教員の捉えや思いも異なります。

― よりよい理解のために取り組んでみよう！ ―

保育者のみなさんへ ～小学校との接続のために～

小学校教員のみなさんへ ～園・所との接続のために～

1 環境等について

- 入学前に、年長児と保育者で学校探検に出かける。
- 物の置き場所やトイレ、洗面所等、実際に小学校で使用し確認する。

- 園・所にあった本、よく知っている歌、遊び等の情報を収集して用意する。
- 園・所での暮らしの様子を参考に、机や椅子等の使い方を工夫する。

2 参観中の視点について ～ 以下のような視点で、参観してみましょう。～

子　供　学びを楽しんでいるか。

授　業　子供が幼児教育で身に付けた力を発揮できているか。

教　員　一人一人のものの見方や考え方を尊重しているか。

子　供　夢中になって遊んでいるか。

環　境　子供が主体性を発揮できる環境になっているか。

保育者　一人一人の子供に応じて対応しているか。

3 研修会での視点について ～ 子供の姿をもとに、気付いたことを話してみましょう。～

- 幼児期の学びとつながる姿について
- 子供の主体性が発揮された場面について
- 非認知能力が学びに生かされた場面について

- 小学校での学びとつながる姿について
- 子供が主体性を発揮していた環境について
- 遊びの中に見える非認知能力について

幼児教育は、環境を通して行われます。

幼児期は、子供が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わう体験を重ねることが重視されています。その際、子供が環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして試行錯誤したり、考えたりするようになることが大切です。

小学校教育では、学習と生活の場にふさわしい教室環境づくりが求められます。子供が安心し、落ち着いて活動できる環境は、子供の心の育成にもつながります。

「環境」のように、同じ言葉でも保育者と教員のもつイメージが異なる言葉や、小学校でよく用いられていても、幼児教育施設ではあまりなじみのない言葉もあります（例：評価、遊び、ねらい、指導等）。話し合う機会が増えてきたら、このような言葉のイメージを話し合ってみることも、互いの教育・保育を理解する上で必要です。

ぜひ、たくさん話をして互いの理解を深めていきましょう。